

今昔物語集の形容詞の体系的性
——中古資料との比較を交えつつ——

村 田 菜穂子*

**The Systemic Nature of the Adjectives used in the
Konjyaku Monogatari-Shu (Tales of Times Now Past)
—A comparison with other ancient and medieval works—**

Nahoko Murata *

Abstract

This article discusses new adjectives which were not seen in the works researched to date in this series: ancient works, *The Anthology of the Eight Poems*, prose works from the Heian period and the documents written in Chinese with signs rendering into Japanese-based on *A Contrastive Lexical List of Adjectives in the Konjaku Monogatari-Shu (Tales of Times now Past)* -*Tenjiku-Bu* and *Shintan-Bu*, *Honcho Buppo-Bu* and *Honcho-Sezoku-Bu* which have already been published.

The paper focuses on the adjectives used in the *Konjyaku Monogatari-Shu (Tales of Times now Past)* and analyzes the systematic nature of this work, comparing it with other ancient and medieval works.

キーワード

今昔物語集、形容詞、見出し語水準、構成比率、体系的性

—
これまで、上代資料で使用された形容詞(上代形容詞)と中古資料で使用された形容詞(中古形容詞)とにどのような差があるのかを探るべく、後に示す資料を対象として上代形容詞と中古形容詞とを採取し、それぞれの形容詞について、語構成をはじめとする質的性格および構成比率などの量的性格についての考察を拙著^(注1)において行ってきた。

その結果、上代形容詞と中古形容詞とでは、語構成法にも明らかな差が認められるようになるほか、ク活用とシク活用の構成比率に大きな差が認められることが明らかに

*むらた なほこ：大阪国際大学国際コミュニケーション学部准教授 (2011.10.3受理)

なった。また、上代形容詞において傾向として認められた形式(活用)と意味との関係性、すなわち、ク活用形容詞には属性を表す語が多く、シク活用には情意を表す語が多いという対立的な関係性にも変化が見られるようになり、中古に入って新たに造語された形容詞については、必ずしもこの形式と意味との関係性が当てはまらない、換言すると、ク活用形容詞でありながらもその意味は情意性のものであるという形容詞が多数存在するようになる状況が認められた。そして、このような形式と意味との関係性の変化の背景には、語の構成上の問題、すなわち、上代では単一的形式の一次的な形容詞が主流であったのに対して、中古では、当代新たに生産された形容詞、とりわけク活用形容詞において、その多くが自己増殖による二次的な複合的形式の語(第二次形容詞)であるという、語構成面における質的变化が深く関わっている、換言すると、上代形容詞に認められた形式(活用)と意味との関係性は単一的形式の一次的な形容詞について認められた関係性であって、中古に入って二次的に構成された複合的形式の形容詞にはこの関係性が直ちに当てはまらなと捉え得ることについて述べた。

さらに、前稿①「ク活用形容詞とシク活用形容詞の量的構成と語構成」^(注2)では、形容詞の成立において、まず状態的な意味を表す語が成立してから後に情意的な意味を表す語が成立するという流れは、後世、シク活用形容詞に限らずク活用形容詞についても情意的意味を表す語の造語へ傾いていくという方向性がうかがえることについて言及した。

また、活用別構成比率や構成単位数、語のつくりといった観点から、資料の性格を考慮しつつ、〔A〕中古散文作品、〔B〕八代集ならびに〔C〕訓点資料で使用された形容詞を比較すると各形容詞の間には差違が認められ、さらに、〔A〕〔B〕〔C〕のそれぞれの形容詞と上代形容詞とを並べてみると、上代形容詞と最も近くに位置するのが〔C〕訓点資料の形容詞で、これに〔B〕八代集の形容詞が続き、最後に上代形容詞と最も遠くに位置するのが〔A〕中古散文作品の形容詞であるという様相がうかがえるということについてもすでに述べた点である。^(注3)ただし、上に述べたことは、上記の資料の調査の範囲内という限定付きであることは断っておかねばならないが、稿者は資料の範囲を拡大してもおおよそはこの線からは外れないだろうと見ている。

以上のような点を踏まえつつ、本稿ではこれまでに取り上げてこなかった『今昔物語集』^(注4)を新たに取り上げ、本作品で使用された形容詞(「今昔物語集の形容詞」)^(注5)の見出し語に焦点を当てその体系的特徴について、上代形容詞と〔A〕中古散文作品・〔B〕八代集および〔C〕訓点資料の形容詞との比較を交えながら、量的な側面および質的な側面からその特徴を分析・考察する。なお、数量的分析に際しては、すでに公表している資料①「今昔物語集の形容詞対照語彙表——天竺・震旦部——」^(注6)、資料②「今昔物語集の形容詞対照語彙表——本朝仏法部——」^(注7)、資料③「今昔物語集の形容詞対照語彙表——本朝世俗部——」^(注8)に基づいている。

【上代資料】

上代形容詞を採取する資料としたのは、『時代別国語大辞典上代編』で、これに立項されている形容詞のうち、東歌・防人歌に使われている東国語方言の語や複合形容詞中にのみその存在が確認される語を除き、万葉集・古事記(仮名書

き部分)・日本書紀(同)・風土記(同)・続日本紀宣命・祝詞に用例のあるものを上代形容詞として認めた。

【中古資料】

〔A〕中古散文作品

『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『多武峯少将物語』『篁物語』『宇津保物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『和泉式部日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『堤中納言物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『讃岐典侍日記』『とりかへばや物語』

〔B〕八代集

『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』『新古今集』

〔C〕訓点資料^(注9)

『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』『神田本白氏文集卷第三・四』『高山寺本古往来』

二

今昔物語集の形容詞は、異なり語数でク活用347語・シク活用115語の計462語が、また、延べ語数ではク活用が11,101語・シク活用が3,612語の計14,713語が使用されている。どの巻でどのような形容詞が使われているかについては、前掲資料①～③に示しているのだからに拠りたいが、本稿では今昔物語集で使用された形容詞語彙のまずは体系的な側面を捉えるべく、見出し語水準、すなわち、異なり語数に焦点を当てた分析から行うことにする。

さて、今昔物語集の形容詞462語の中には、上代資料、〔A〕中古散文作品・〔B〕八代集・〔C〕訓点資料のいずれにも見えなかった形容詞(便宜的に「今昔初出の形容詞」と呼ぶ)が104語(ク活用96語・シク活用8語)含まれている。104語というのは異なり語数全体の22.5%、活用別では、ク活用の約28%・シク活用の約7%が従来の資料には見えなかった形容詞である。換言すると、今昔物語集の形容詞はク活用では約7割・シク活用では約9割の語が上代形容詞ないしこれまでに取り上げた中古資料〔A〕〔B〕〔C〕の形容詞と共通している。

さらに、これまでに着目してきた形容詞の発達段階という観点から今昔初出の形容詞を分析するとどうなるかを見ておきたい。ちなみに、形容詞の発達段階については、すでに拙著で詳しく述べたのでここでは簡単に触れておくと、語をつくり上げている各語構成要素の結合における重層的な在り方を分析し、成立した語形が形容詞として第一番目のものであるか、あるいは既存の形容詞に何らかの語構成要素が接合して構成された第二番目(この第二番目の形容詞にさらに別の要素が接合して構成された第三番目)のものであるかを捉えて区別したものが階層構造であり、派生や複合によってどの程度自己増殖が進んでいるかを捉えようとした視点が形容詞の発達段階である。具体的に言うと、形容詞として成立した第一番目の語形である第一次形容詞として「なし・くるし」などがあり、この第

一次形容詞から構成された「をさ／なし・ころ／ぐるし」などは第二次形容詞ということになる。さらに、この第二次形容詞から構成された「ころ／をさ／なし・もの／ころ／ぐるし」などは第三次形容詞となる。そして、今回新たに今昔物語集から採取された形容詞にはこのような三段階のものが存在する。

※今昔初出の形容詞104語の階層構造別の内訳

第一次形容詞……ク活用3語・シク活用5語

第二次形容詞……ク活用82語・シク活用3語

第三次形容詞……ク活用のみ11語

やはり、注目すべきは、今昔物語集における新造語の大半がク活用の第二次形容詞であるという点である。そして、この様相は、今昔物語集に限ったものではなく、一でも述べたように、〔A〕中古散文作品や〔B〕八代集など中古資料から採取された新造語の中心が第二次形容詞であったことと軌を一にしている。

では、以下に今昔初出の形容詞の例を掲げる。

(一)

まずは、第一次形容詞の例を示す。

- (1) ニガシ 此ノ諸ノ海人、数多ク唱タル人ノ為メニハ、其ノ味ヒ極テ美也。数少ク唱ヘタル人ノ為メニハ、其ノ味ヒ少シ辛ク苦シ。〔卷四第三七〕
- (2) ヒキシ 鶴答テ云ク、「(中略)我レハ天下ヲ高クモ下クモ飛ビ播ル事、心ニ任セタリ。〔卷五第二四〕
- (3) ネザケシ 今昔、天竺ニ国王御ケリ。其ノ国王ノ心極テネザケクテ、性本ヨリトロメキテゾ有ケル。〔卷四第三一〕
- (4) イタマシ 妻ニ語テ云ク、「天上・人間ニハ子有ル人ヲ富人トス。子無キ人ヲバ劇キ事トス。我レ年老ニ臨テ子無シ。サレバ樹神ニ可祈也」ト云テ祈ル間、妻既ニ懐任シヌ。〔卷一第一五〕
- (5) クルハシ 僧、懃サノ余リニ糸荒ラカニ「何ノ料ニ其ヲバ尋ネ給ゾ」ト問ケレバ、惟規、「然ラバ、其等ヲ見テコソハ□□メ」ト、打息ミツツ云ケレバ、僧、此ノ事ヲ、「糸狂シ」ト云テ、逃テ去ニケリ。〔卷三第一二八〕
- (6) ソネマシ 丁蘭ガ妻、悪性ニシテ、常ニ此ノ事ヲ僧シク悪ク思ヒケリ。〔卷九第三〕
- (7) ネタマシ 深キ淵ニ行テ、子ヲ投入レツ。其ノ子淵ニ入テ、即チ浮出デ、足ヲ踏反リ、手ヲ攢ミ、目ヲ大キニ見睥カシテ、擲出ダシテ云ク、「妬哉。我レ今三年徴ラムトシツル者ヲ」ト。〔卷一七第三七〕

(8) ヲンナメカシ 女房ハ光遠二人計ガ力ヲ持タルゾ。然コソ細ヤカニ女メカシケレドモ、
光遠ガ手戯^{てたはぶ}レ為^すルニ、取タル腕ヲ強ク被取^{とられ}タレバ、手弘^{ひろ}ゴリテ免シ
ツル物ヲ。[卷二三第二四]

(1)～(3)はク活用の例、(4)～(8)はシク活用の例である。(1)(2)の造語形式は「語基+シ」、(3)はカ行下二段活用動詞ネヂクの連用形ネヂケをケシ型形容詞の語幹相当として捉えて構成されたところの「動詞(連用形)+シ」という造語形式と捉えられる。また、シク活用である(4)～(8)は基本的にはすべて「動詞被覆形+シ」という造語形式と考えられるものであるが、(5)狂(クルハ)シと(7)ネタマシとについては一歩突っ込んだ考察が必要であろう。

まず、(5)狂(クルハ)シであるが、この語形は日本古典文学大系『今昔物語集』(以下、「旧大系」)のこの箇所にもに見られる孤例であり、新日本古典文学大系(以下、「新大系」)、新編日本古典全集(以下、「新編全集」)、新潮古典集成(以下、「集成」)においては、いずれも「クルホシ」と訓みが振られているものである。本来、この「狂」にはルビは無く、凡例に拠ると、いずれも校註者の判断によって「狂シ」に対する語形の認定が施されたものであり、この用例の扱いには慎重な態度が求められる語例である。

ところで、「クルホシ」およびその周辺の語について、小松英雄氏は、「クルホシ(およびクルフ)」が仮名文学作品には、使用された形跡がまったくないことを指摘され、その理由を、「『くるほし』が露骨な意味を端的に表わす語であるために、和文の表現になじまなかった」と説明されている。他方、漢文訓読系の文献には「モノグルハシ」という語形は見えないが、「クルホシ」という語形が若干存在している。しかし、『類聚名義抄』や『色葉字類抄』には「クルホシ」「クルハシ」という語形は見えないところから、両語形は日常語ではなく、「和文系に用いられる『ものぐるほし』をもとにして、新しく『クルホシ』を作り出したものの、結局、広く用いられることなしに消滅したのではないかと説かれている。

さらにまた、小松氏は、「モノグルハシ」という語形が『宇治拾遺物語』や『平家物語』に見えることを指摘し、「『ものぐるほし』という形容詞は、どうやら、中世になってから使われはじめている(中略)。これは、『くるほし』に接頭辞『もの=』を冠して作られた語形ではなく、『ものぐるほし』から派生された語形とみなすのが順当」ということも述べておられる。

小松氏の言われるように、順当な語形成の経路は、

- [1] 動詞「クルフ」の未然形(被覆形)+接尾辞シ→「クルハシ」が構成された後に、
- [2] 母音転換を起こして「クルホシ」ができ、さらにその後、
- [3] この「クルホシ」に接頭辞「モノ」が上接して「モノクルホシ」ができた後に、
連濁を起こして「モノグルホシ」が生まれた

(※ 下線を施した語形は理論的なもの)

ということであろうが、「クルハシ」および「クルホシ」が非顕在のままに「モノグルホシ」が成立し、この「モノグルホシ」をもとにして「クルホシ」が形成されたが、「クルホシ」

は漢文訓読系の文献に偏在する語形であるとともに、日常語としての地位を獲得するには至らなかったという見方、さらに、『くろふ』に直接結びつく語形「＝クルハシ」がのちに新たな表現価値を求めて「派生の過程を逆方向にもどして」「モノグルハシ」を造語したという小松氏の見方は説得力があり、首肯すべきものであろう。

以上のようなことを踏まえると、和文体を基調とする本朝世俗部に見える(5)の「クルハシ」を直ちに認めることには問題があると言わざるを得ず、現時点ではひとまず措く方がよいであろう。

次に、(7)「妬」は旧大系では「ネタマシイ」と訓んでいるが、新大系および新編全集ではこれを「ネタイ」と訓んでいる。そののみか、旧大系でもこの箇所以外では「妬」および「嫉」はすべてネタシと訓んでおり、(5)同様、この語もまた孤例ということになる。日本国語大辞典第二版「ねたましい」の語誌を見ると、「(1)類義語『ねたし』は中古和文にもかなり見られるのに対し、『ねたまし』はほとんど見られない。これは『ねたまし』が漢文訓読語であったことによるらしく、『源氏物語』にある『ねたましがほ』も漢籍をふまえた表現である。」とある。これに従えば、第一次形容詞「ネタマシ」が非顕在のうちに形容動詞「ねたましがほ(なり)」が先行して健在化しているというもので、この語も特殊な事情を抱えているものである。もっとも、(7)ネタマシと(5)クルハシとは些か事情は異なり、後者が和文体を基調とする本朝世俗部に見える例であるのに対して、前者は和文体と漢文訓読体とが混在する本朝仏法部に見える例であり、漢文訓読語と考えられるネタマシが出現する可能性は十分考えられるので、ここではひとまず新出の形容詞として認めておくことにする。

(二)

次に、今昔初出である第二次形容詞の例を示す。

(9) サトリナシ ^{ちご} 兒母ノ ^{をしへ} 教ニ ^{した} 師ノ ^{もと} 許ニ ^{ゆき} 行テ、^の 罵リ ^{はぢし} 辱メテ云ク、「汝 ^{しやもん} 汝沙門、^{おろか} 愚ニ ^{ごと} 識リ無シ。頭ハ ^{かしら} 獸ノ ^{けだもの} 如シ」ト云テ去ニキ。[卷二第(三四)]

(10) ジヒナシ ^{いまはむかし} 今昔、^{てんぢく} 天竺ノ ^{あほんだいく} 阿槃提国ニ一人ノ ^{ちやうじやあり} 長者有ケリ。家大ニ ^{おほき} 富テ ^{とみ} 財多シ。而ルニ ^{しか} 其ノ人、^{じひ} 慳貪深クシテ ^{じひ} 慈悲無シ。[卷二第(七)]

(11) サルゲナシ 后、^け サル ^{やう} 氣無キ様ニテ、^{ぬれ} 湿タル紙ヲ以テ、手ノ裏ノ ^{ぬら} 墨ヲ潤シテ障子ニ押シ付ケツ。[卷一〇第三四]

(12) カヘシガタシ 「……彼ノ御弟ノ子ノ『其ノ ^{せむ} 錢ノ代ヲ返セ』ト責ルハ ^{ことわり} 理ナレドモ、^{かへすべ} 可返キ物ノ員ノ ^{かず} 極テ多カレバ、^{きはめ} 惜シク ^を 思エテ ^{おぼ} 難返キ也。[卷二第(三三)]

(13) ホウジガタシ 道公ニ ^{むかひ} 向テ拜シテ云ク、「^{しやうにん} 聖人ノ ^{におひうま} 昨日 駄ノ ^{れうぢ} 足ヲ療治シ給ヘルニ依テ、翁此ノ ^{くじ} 公事ヲ勤メツ。此ノ ^{ほうじがた} 恩難報シ。[卷一三第三四]

- (14) トリノケウシ 車ノ音、前ナド不聞へ成ヌレバ、極ク哀ニ思ヘテ、居タリツル茵ニ
 移リ香媚ナバ、取去ケ躑シ。[卷二四第三一]
- (15) イリヤスシ 聖人ノ云ク、「難至クシテ易出キハ人ノ道也。易入クシテ難出キハ三途
 也。[卷一四第一〇]
- (16) カハハユシ 男此レヲ聞クニ、何許思エケム、実ニ喜ク忝ク思エテ、這、フ立テ去
 ス。然レドモ、極テカハ、ユク思エテ、此ノ事ヲ人ニ不云ズシテ毫ケ
 行ク程ニ、[卷一九第九]
- (17) シホカラシ 鱒ノ塩辛・鯛ノ醬ナドノ諸ニ塩辛キ物共ヲ盛タリ。[卷二八第五]
- (18) フルクサシ 「何ナル人此ル人ニ副テ有ラム。我レハ年老テ旧臭キ人ニ副タルガ事ニ
 触テ六借ク思ユルニ、[卷二二第八]
- (19) カボソシ 常ニ宿直処ニ弓・胡籙ヲ立、藁沓ト云物ヲ一足畳ノ下ニ隠シテ、賤下衆
 男一人ヲゾ置タリケレバ、此ヲ見ル人、「カ細クテモ有ル者カナ」ト思ケ
 ルニ、[卷二三第一四]
- (20) ケアシ 其レガ京ヨリ元興寺ニ行ケルニ、冬比也、泉川原風極テ気悪吹テ、寒キ
 事無限シ。[卷二〇第四〇]
- (21) ケムツカシ 修行者、此ヲ心得様、「此ハ鬼ノ妻ニシテ、常ニ来テ、此様ニ懐抱シテ
 返ル也ケリ」ト思フニモ、極テ気六借シ。[卷三一第一四]
- (22) クチサカシ 元輔、「白事ナセソ、尊。此ク道理ヲ云聞セたらバコソ、後、ニハ此ノ
 君達ハ不咲ザラメ。不然ズハ、口賢キ君達ハ永ク咲ハム者ゾ」ト云テ
 ゾ渡ニケル。[卷二八第六]

(9) ~ (19) はク活用形容詞、(20) ~ (22) はシク活用形容詞の例である。先に述べたように、今昔で新たに見えるようになった形容詞104語うち、最も多いのは第二次形容詞(85語)であり、その大半はク活用形容詞82語(79.0%)で、シク活用形容詞はわずか3語(3.0%)にとどまっていて、この様相は他の中古資料の形容詞で見られた様相と同様である。

では先に、シク活用形容詞(20) ~ (22) から見ていくと、(20) ケアシ・(21) ケムツカシは「接頭辞+(第一次)形容詞」という造語形式、(22) クチサカシは「名詞+(第一次)形容詞」という造語形式をとる第二次形容詞である。

他方、ク活用である第二次形容詞は、(9) サトリナシ・(10) ジヒナシなど「～+無シ」という形式をとるものが46語と最も多く、次いで、「動詞(連用形)+(第一次)形容詞」という造語形式である(12) カヘシガタシ・(13) ホウジガタシなど「～+がたし」をとるものが38語見える。このように、今昔物語集における新造語の大半は、他の中古資料の形容詞同様、「無シ」ないし「かたし」を後項要素とするものであり、これらの形式の造語力の大きさがうかがえる。このほか、「動詞(連用形)+(第一次)形容詞」という造語形式をとる語として、(14) トリノケウシ・(15) イリヤスシなど「かたし」以外の第一次形容詞を後項要素とするものが(4語)が見える。また、「名詞+(第一次)形容詞」という造語形式の形容詞として(16) カハハユシ・(17) シホカラシという語や、「形容詞(語幹)+(第一次)形容詞」という造語形式の(18) フルクサシ、「接頭辞+(第一次)形容詞」という造語形式の(19) カボソシが見える。

(三)

続いて、今昔初出の第三次形容詞の例を示す。

(23) シレハカナシ 「此^{かばかり}許入^{はか}レテ謀^{あさま}ル事ハ、奇^{ねた}異^かシク妬^{しり}キ事也。此ク知^{そひ}タラマシカバ、副
テ行^かテコソ懸^{かく}サスベカリケレ。我ガ心ヲ見^いムト思^しテ、此ハシツル也
ケリ。何ニ白^{いか}墓^し無^{れは}キ者^{かな}ト思^{おも}トスラム」ト思フニ、[卷三〇第一]

(24) ナマカシライタシ 「……然^さハ、此^かク新^{あら}タニ人ヲバ取^あリ殺^りス物ニコソ有^{あり}ケレ」ト語ル
ヲ聞^きクニ、此ノ男^{なま}モ生^{なま}頭^{かしら}痛^{いた}ク成^{なり}テ、「女ハ喜^こビツレドモ、其^そレガ
気^けノ為^すルナメリ」ト思^しテ、其ノ日ハ留^{とど}マリテ、家ニ返^{かへ}ニケリ。[卷
二七第二〇]

(25) ササヘエガタシ 其ノ時ニ超^{おおく}高^{いくさ}、多^{おおく}ノ軍ヲ引^ひキ具^ぐシテ、望^{かく}夷^{せむ}宮ヲ困^こムテ責^{せむ}ル時ニ、
国王、軍ヲ以^もテ支^さト云ヘドモ、軍ノ長^{たけ}劣^{たけ}リタルニ依^{より}テ難^さ支^さ得^えシ。
[卷一〇第一]

(26) サトリエガタシ 夢^{さめ}覚^めテ後^{のち}、心ニ喜^{よろこ}ヲ成^なシテ、夢ニ見^みル所ノ経^{きやう}ヲ尋^{もと}ネ求^{もと}ルニ、
大^{やまと}和^{とくに}国、高^{たけち}市^{のこほり}郡、久^く米^め寺ノ東^でノ塔^たノ本^{もと}ニシテ此^{この}経^{きやう}ヲ得^えタリ。喜^{よろこ}テ
是^{これ}ヲ開^{ひら}見^きルト云ヘドモ、難^さ悟^と得^えシ。[卷一一第九]

先にも述べたように、今昔物語集初出の第三次形容詞はすべてク活用形容詞である。全11語のうち、9語が(25) ササヘエガタシ・(26) サトリエガタシなどと同じく、「かたし」という第一次形容詞を後項要素(の一部)に含む第二次形容詞(「～+がたし」)から構成された「動詞(連用形)+(第二次)形容詞」という造語形式の語であり、今昔物語集における第三次形容詞の新造語はこの造語形式による高次結合語がほとんどである。そして、このほか、(23) シレハカナシのように「無シ」という第一次形容詞を後項要素(の一部)に含む第二次形容詞(「～+無シ」)から構成されたもの、接頭辞ナマが上接して「接頭辞+(第

二次)形容詞」という造語形式をとる(24)ナマカシライタシが見える。

ここで注目したいのは、第三次形容詞の構成に際しては「無シ」よりも「かたし」の方が優勢であるという点である。というのも、第二次形容詞の構成に関しては、「かたし」よりも「無シ」の方がより多くの造語に与っているのに対し、第三次形容詞というさらなる高次結合の段階へ進むのは「無シ」よりも「かたし」の方が優勢であるという点は興味深い。

ちなみに、中古資料〔A〕散文作品・〔B〕八代集・〔C〕訓点資料から採取された第三次形容詞は、次のような第一次形容詞を後項要素(の一部)に含むものである。

～+かたし(18語)、～+無シ(15語)、～+いたし(6語)、～+うし・～+にくし・～+はづかし(以上3語)、～+くるし(2語)、～+しろし・～+ちかし・～+のどけし・～+はゆし・～+ほそし・～+やすし・～+わるし・～+わろし・～+かまし・～+めづらし・～+やまし・～+をし(以上1語)

このように、「かたし」が「無シ」を上回るのは今昔物語集に限ったことではないようであるが、他の中古資料と比較して、今昔物語集における第三次形容詞において「かたし」の造語力が抜き出ているのは一つの特徴と言ってよいかもしれない。

三

では次に、今昔物語集の形容詞の体系的な側面を捉えるべく、異なり語数(種類)からこれまでに取り上げた資料の形容詞との比較を行いつつ、(一)活用別構成比率・(二)新旧形容詞の構成別比率・(三)階層構造別構成比率という点からの分析・考察を行うことにする。

(一)

上代形容詞ならびに中古形容詞の活用別構成比率は、分析を行った結果、上代形容詞ではク活用とシク活用の構成比率には大きな開きはなくほぼ均衡が保たれていたが、中古になると変化が起こってク活用とシク活用の構成比率の均衡が破れ、いずれの資料においてもク活用形容詞の割合がシク活用形容詞のそれを上回るようになることはすでに指摘しているところである。そしてまた、中古資料の中でも、とりわけ〔B〕八代集および〔C〕訓点資料にはシク活用形容詞が極端に少ないことを突き止めるとともに、その事情がそれぞれの資料的性格から情意的意味を表すシク活用形容詞が少ないという状況が見られることについてもすでに述べている。^(註11)

さて、次に示した表1は資料毎の活用別構成比率を分析した結果である。これを見ると、今昔物語集の形容詞の活用別構成比率は、中古資料の中では〔A〕散文作品よりも特殊な事情を抱える〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近似している。一口に散文作品と言っても伝奇や日記・随筆、宮廷女流作品や歴史物語などジャンルは多岐に亘っており、一様には捉えられない面もあるが、〔A〕散文作品よりも〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近似している点は今昔物語集の体系的特徴を語る上ではやはり注目すべき点であろう。

表 1 活用別構成比率

資料 活用	上代		散文		八代		訓点		今昔	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
ク活用	135	54.2	741	65.6	210	77.8	153	77.3	347	75.1
シク活用	114	45.8	389	34.4	60	22.2	45	22.7	115	24.9
計	249	100.0	1,130	100.0	270	100.0	198	100.0	462	100.0

先にも述べたように、今昔物語集では、漢文訓読体と和文体のそれぞれの文体が巻によって偏らないし混在するという事情がある。この点を考慮し、漢文訓読体を基調とする〔イ〕天竺・震旦部、漢文訓読体と和文体とが混在する〔ロ〕本朝仏法部、そして、和文体を基調とする〔ハ〕本朝世俗部とを区別して、それぞれの活用別構成比率を分析すると次のようになる。

	ク活用形容詞	シク活用形容詞
〔イ〕天竺・震旦部	191語 (76.4%)	59語 (23.6%)
〔ロ〕本朝仏法部	224語 (72.3%)	86語 (27.2%)
〔ハ〕本朝世俗部	231語 (70.6%)	96語 (29.4%)

このように、漢文訓読体を基調とする〔イ〕天竺・震旦部の活用別構成比率は、〔A〕中古散文作品よりも〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近く、一方の和文体を基調とする〔ハ〕本朝世俗部のそれは〔B〕八代集や〔C〕訓点資料よりもむしろ〔A〕中古散文作品に近似している。そして、両文体が混在する〔ロ〕本朝仏法部の活用別構成比率はおおよそ〔イ〕と〔ハ〕の中間値を示している。全体として、今昔物語集の体系は表1のようになるが、文体と表現内容が一樣には構成されていない今昔物語集では、文体ないし内容の差違と並行して活用別構成比率にも差違が認められるということは押えておく必要がある。

(二)

中古資料で使用された形容詞には、上代資料ですでにその存在が確認できる語と、中古に入ってからの存在が確認できるようになった語の、歴史性の異なる二種が併用されている。これまで、前者を既存の形容詞、後者を新出の形容詞と呼んで区別し、各資料において両者がどのような構成比率であるのかについても分析を行っている。今昔物語集についても同様に、既存の形容詞・新出の形容詞の新旧形容詞構成比率を分析し、他の中古資料とともに表2に示す。

表 2 新旧形容詞別構成比率

資料 新旧	散文		八代		訓点		今昔	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
上代既存	149	13.2	96	35.6	79	39.9	114	24.7
中古新出	981	86.8	174	64.4	119	60.1	348	75.3
計	1,130	100.0	270	100.0	198	100.0	462	100.0

表2にあるように、新旧形容詞の構成比率は、いずれの資料においても、中古新出の形容詞が上代既存の形容詞を大きく上回っており、新出の形容詞が少なくとも6割以上を占めている。とりわけ、〔A〕中古散文作品では新出形容詞の構成比率はかけ離れて高く、8割強が当代的な語によって構成されているという体系的特徴がうかがえる。これに対して、〔B〕八代集と〔C〕訓点資料との構成比率は近似する中、新旧形容詞の構成比率はその差がやや縮まり、〔B〕八代集・〔C〕訓点資料では〔A〕中古散文作品に比べて上代既存の形容詞の割合が高めである、換言すると、歴史性のある語を比較的多く用いているという特徴がうかがえる。

そして、これら三資料と今昔物語集とを並べてみると、今昔物語集の新旧形容詞構成比率は、〔A〕中古散文作品と〔B〕八代集および〔C〕訓点資料のほぼ中間的な値を示している。これは、先にも述べたように、今昔物語集が単純な和文体ではなく、漢文訓読体を含んでいることが関与しているということが考えられる。

それでは、ここでも、本節(一)で見たように、文体の違いを考慮し、〔イ〕天竺・震旦部、〔ロ〕本朝仏法部、〔ハ〕本朝世俗部を分けて、新旧形容詞の構成比率を分析しておく。

	既存の形容詞	新出の形容詞
〔イ〕天竺・震旦部	93語 (37.2%)	157語 (62.8%)
〔ロ〕本朝仏法部	101語 (32.6%)	209語 (67.4%)
〔ハ〕本朝世俗部	101語 (30.9%)	226語 (69.1%)

上に示したように、新旧形容詞の構成比率もまた、先に見た活用別構成比率と同様、〔イ〕天竺・震旦部のそれは〔B〕八代集や〔C〕訓点資料近く、これに〔ロ〕本朝仏法部、そして次に〔ハ〕本朝世俗部が続くという結果になっている。もっとも、和文体の〔ハ〕本朝世俗部もまた〔A〕中古散文作品よりも〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近似しており、文体ないし表現内容を分けて見た場合でも、体系(語の種類)としては、当代に造語された新しい形容詞は〔A〕中古散文作品ほどは多くはなく、今昔物語集の形容詞は、どちらかと言えば、〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近い保守的な側面があるという体系性が見て取れる。

(三)

最後に、形容詞の発達段階から今昔物語集の形容詞の体系性を分析してみたい。なお、二で考察したのはこれまで取り上げた中古資料には見られず今昔物語集で新たに見えるようになった形容詞についてである。ここでは、今昔新出の形容詞のみならず、これらを含めた今昔物語集全形容詞についての階層構造を分析・考察する。

さて、次に示した表3は、階層構造別の構成比率を分析したものである。

表3 階層構造別構成比率

資料	上代		散文		八代		訓点		今昔	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
第一次	188	75.5	392	34.7	126	46.7	103	52.0	182	39.4
第二次	61	24.5	689	61.0	139	51.5	95	48.0	265	57.4
第三次			49	4.3	5	1.9			15	3.2
計	249	100.0	1,130	100.0	270	100.0	198	100.0	462	100.0

表3を見ると、上代形容詞では第一次形容詞が7割強を占め、第二次形容詞は2割強にとどまっている。一方、中古資料においては第二次形容詞の割合が一気に高くなって、〔C〕訓点資料以外の資料では第二次形容詞が過半数を占めるようになり様相が一変する。〔C〕訓点資料だけが依然として第一次形容詞の優位性を保持している点は見逃せないところではあるが、第一次形容詞と第二次形容詞との構成比率は拮抗しており、〔B〕八代集の形容詞の構成比率との開きはそれほど大きいものではないこともおさえておく必要がある。そして、これら三資料と並べてみて、今昔物語集の形容詞はちょうど〔A〕中古散文作品および〔B〕八代集の形容詞の中間的な比率構成となっており、ここにも今昔物語集の形容詞が漢文訓読体を含むことが影響しているように見える結果が出ている。つまり、今昔物語集における文体的な問題が影響して、〔A〕と〔B〕との中間的な値となっていることを想起させるのだが、実際のところ、下に示したように、〔イ〕天竺・震旦部、〔ロ〕本朝仏法部、〔ハ〕本朝世俗部に分けて階層構造別構成比率を見ても、(一)活用や(二)新旧形容詞の構成比率に比べて文体の違いによる差がほとんど見られない。換言すると、今昔物語集では体系として、第一次・第二次・第三次という発達段階の異なる形容詞が文体差にほぼ影響されない形で使用されているという様相がうかがえる。

	第一次形容詞	第二次形容詞	第三次形容詞
〔イ〕天竺・震旦部	119語 (47.6%)	126語 (50.4%)	5語 (2.0%)
〔ロ〕本朝仏法部	138語 (44.5%)	165語 (53.2%)	7語 (2.3%)
〔ハ〕本朝世俗部	157語 (48.0%)	163語 (49.8%)	7語 (2.1%)

四

以上、これまで述べてきた事柄の概要を述べると、異なり語数(種類)から見た体系的特徴として、今昔物語集の形容詞は、他の中古の形容詞と同じく、ク活用形容詞がシク活用形容詞を上回ること、また、上代から存在する伝統的な語よりも当代に造語された新出の語が多用されていることが明らかになった。さらに、文体(および表現内容)に配慮して見てみると、和文体を基調とする〔ハ〕本朝世俗部は他の部よりも〔A〕中古散文作品に近似し、漢文訓読体を基調とする〔イ〕天竺・震旦部は〔A〕よりも保守的な語を好んで用いている〔B〕八代集や〔C〕訓点資料に近似し、また、〔ロ〕本朝仏法部は両者の中間的な様相を呈していることも明らかになった。ただし、第一次形容詞・第二次形容詞・第

三次形容詞の構成比率は、〔A〕中古散文作品や〔B〕八代集の形容詞と同じく、第二次形容詞の割合が高くなっているものの、文体(および表現内容)の異なる〔イ〕天竺・震旦部、〔ロ〕本朝仏法部、〔ハ〕本朝世俗部の間の差は小さく、体系として、階層構造の異なる形容詞の用いられ方には文体があまり影響していない様相がうかがえた。

【付記】 本稿は、日本学術振興会平成22-24年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号22520479)による研究成果の一部である。

注

注1 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』(〔2005・11〕和泉書院)

注2 『国語語彙史の研究』30(〔2011・2〕和泉書院)

注3 注1 第一篇第二章第三節参照。

注4 今昔物語集の形容詞は、日本古典文学大系『今昔物語集』1~5〔1959・3-1963・5〕岩波書店に基づいた調査を基本したが、見出し語の語形および延べ語数を確定する際に、『今昔物語集自立語索引』(馬淵和夫監修・有賀嘉寿子編〔1982・2〕笠間書院)、『今昔物語集文節索引』1~31(馬淵和夫監修〔1970・9-1981・8〕笠間書院)、および新日本古典文学大系『今昔物語集』1~5〔1993・5-1999・3〕岩波書店)を参考にして一部改めた箇所がある。また、本稿で取り上げた用例は新日本古典文学大系の翻刻を参照した。

注5 伊藤雅光氏『計量言語学入門』第24章24.3「語彙体系の量的構造と語彙運用の量的構造」(2002・4 大修館書店)では、語彙の量的構造について、見出し語水準に基づく方を「語彙体系の量的構造」、単位語水準に基づく方を「語彙運用の量的構造」と呼び分け、見出し語に基づく異なり語数は語彙の体系、単位語に基づく延べ語数は語彙の運用を示すものであることを述べておられる。

注6 『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』22-3〔2009・3〕

注7 『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』23-1〔2009・10〕

注8 『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』23-2〔2010・1〕

注9 中古資料を対象とするという場合には、散文や韻文作品とともに訓点資料を含めて取り上げる必要がある。しかし、訓点資料には、完全附訓の箇所以外の語形がすべて推定であるため訳読者の解説結果に左右される面が大きいという点や、確例である完全附訓の語のみを採取しただけでは当該訓点資料の全体像を把握することができない点など、語彙の数量的問題を扱うには問題があることを踏まえ、訓点資料を散文作品や八代集と同等とは見なさず参考資料として位置付けてきた。本稿でもこの点を念頭に置きつつ、各資料で使用された形容詞の体系性(見出し語水準)の分析・考察を行う。

注10 『徒然草抜書 表現解析の方法』(〔1990・11〕講談社)。もとは『徒然草抜書 解釈の原点』(〔1983・6〕三省堂)。なお、前者の目次の最後に「本書は一九八三年に三省堂から刊行された『徒然草抜書 解釈の原点』を全面的に改稿した文庫版です。」とある。

注11 注1 第一篇第二章第二節~第四節参照。

